

## 卒業生からのメッセージ



藤本 賢司 さん

【プロフィール】  
2006年度プロジェクト科目「京都暮らしの音と映像」受講生。  
2009年3月に同志社大学社会学部教育文化学科を卒業し、現在、株式会社西遊旅行大阪支社に勤務している。

1年間で「京都」をテーマに一つのドキュメンタリー作品を作る。これが2006年度春・秋に受講した「京都暮らしの音と映像」の授業内容だ。始めは座学で、映像や撮影のイロハを教わった。各自テーマを考えプレゼンし、それを元に2班(4人ずつ)にグループ分け。班ごとに作品内容の話し合い、監督・制作・カメラ・音声と役割分担を決め、ロケハン(撮影の下見)へ京都の町へ繰り出した。私の班のテーマは「京都で下宿する学生の目から見た京都の魅力」。テーマを決めるにあたり、「誰に」「何を」を伝えたいかを明確にすることが強く求められた。ロケハンや撮影では、平日や土日フルを使って、事前にアボや許可を取り京都中を駆け回った。撮影が終わると、怒涛の編集作業。何日かスタジ



オ籠りもした。計算すると費やした時間は合計300時間弱を数えていた。

達成感もさることながら、本当に多くのものを得た。全面サポートしていただいたNPO法人「京都

の文化を映像で記録する会」の方々とは今でも交流があるし、当時の班員は今でも頻りに会う大切な友人だ。1年間作品と向き合い、京都という土地がより身近になった。何より「映像にする」というアイデアは、その後の人生を確実に豊かにしている。留学、就職や赴任、自身や友人の結婚式で、10本近いムービーを作りお互いにプレゼントし、それは人生の喜びに直結している。

1年間のプロジェクトを成し遂げ、計画を立てる力、チームで動く力、目的を整理する力、周囲を巻き込む力などを身につけられたと思う。それは今の仕事をするにあたって私のベースになっている。プロジェクト科目は、間違いなく在学中に一番受講して良かった科目である。



2014年度プロジェクト科目春学期成果報告会の様子

PBLは、テーマに対して学生が主体的に問題解決に取り組み、その成果を社会に発信するプロジェクト型の教育です。学生が、プロジェクト推進に必要な資質を総合的かつ創造的に運用できる能力とモラル(良心)、すなわち「プロジェクト・リテラシー」を育み、問題解決していくちからを身につけるために、地域社会や企業が持つ教育力は欠かせません。同志社大学PBL推進支援センターでは、「往還型地域連携」による地域活性化を目指して、連携教育のモデルづくりに取り組んでまいりました。今年度は、様々な連携教育の最前線から現状の課題を浮き彫りにし、さらには連携教育の可能性について考えます。大学が地域社会や企業の要望に応えることを優先しがちであった関係に一步踏み込み、大学教育に軸足を置いた連携教育の新たなステージを考える機会と捉えています。

# PBL

Project-Based Learning

## 推進支援センター通信

VOL. 10

## 地域連携とPBL —地域連携教育プログラムとして—

同志社大学PBL推進支援センター長  
文学部教授 山田和人

大学が地域で果たす役割とは何か、地域社会と大学はどのように連携しうるのであるのか、こうした問いかけは日本全国の大学で模索されている。地域連携センターや連携室、連携機構など呼称はさまざまだが、大学内にそうした施設を設けて、大学の地域連携を組織的に進めようとしている。

総務省は、「地域力の創造・地方の再生」を掲げ、「『域学連携』地域づくり活動」を提唱している。「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動」を行うことを目指す。

文部科学省は、地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)を掲げ、「大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学等を支援することで、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在としての大学の機能強化を図る」ことを目的としている。

それぞれ言い古された表現を使えば、地域活性化を図るための事業として、それぞれの省庁で推進している。実は、この画面は、そのまま社会人基礎力(経済産業省)と士力(文部科学省)の育成という一昔前の切

り口とほとんど変わっていないように見える。ただ、今回の事業は、地域の様々な機関と連携することが必須要件であり、定着事業としての成果が強く求められている点が大いように思う。

われわれがPBLの視点からこうした趨勢を見るならば、大学の教育プログラムとしての質向上を目指すべきであり、そのための基盤整備として、言い換えれば質の高い教材としてのフィールド(地域社会)をいかに適切に設定できるかにかかっている。

学生のパフォーマンスを最大値にするための環境と条件をいかに整備していくかが問題であり、各省庁がそれぞれに求める課題にとらわれすぎると、日本全国の大学が多様性を失い、個性を喪失してしまう危険性がある。常に学生を正面に据えた教育プログラムを取り組みの中核に据えていくべきだろう。

教育プログラムである限り、評価の問題は避けては通れない。しかし、アクティブ・ラーニングの評価が従来通りでは通用するまい。むしろ、評価自体がアクティブでなければならない。そこを見ないで、地域社会と連携したプログラムを遂行していくことはできない。

いまこそPBLの原点に返って、いや大学教育の原点に返って、それぞれの大学の個性と多様な学びの機会を提供する地域連携教育のあり方を模索すべきだろう。

### 山田センター長のつぶやき



同志社大学PBL推進支援センターの  
山田和人センター長によるコーナーです。

現場に返る、現場が語る、現場に耳を傾ける。そこから課題解決のヒントが見えてくる。現場を離れて、課題解決はありえない。児童でも生徒でも学生でも、地域社会と連携した学びを実践しようとする時の鉄則だ。一二度足を運んだだけでわかったつもりになるのが一番危険だ。うわすべりの連携教育!

～山田和人センター長 Twitterより抜粋～  
<https://twitter.com/kazuhiyamada>

### 「プロジェクト科目」の活動報告を ご覧いただけます!

京都市営地下鉄丸線今出川駅の北改札口付近に設置されているショーケースにて、2014年度プロジェクト科目春学期成果報告会のポスターセッションで使用したポスターを展示しています。今出川駅をご利用の際には、是非ご注目ください。

また、プロジェクト科目ホームページ「クラスレポート」では、各プロジェクトの活動の様子や成果の報告などを発信しています。2014年度も履修生からの活動報告が日々寄せられています。

詳細はプロジェクト科目の  
ホームページをご覧ください。

### プロジェクト科目とは?

2006年度から始まった「プロジェクト科目」は、教員が一方的に知識を伝授する講義スタイルとは異なり、受講生自身が構想、計画をし、ディスカッションを重ね、行動する実践型スタイルの授業です。全学共通教養教育科目であり、学部・学年の垣根を越えてチームとして共に活動し、プロジェクトを推進していきます。



【問合せ先】  
同志社大学PBL推進支援センター  
〒602-8580  
京都市上京区今出川通丸東一 今出川校地教務課内  
Tel: 075-251-4630 Fax: 075-251-3064  
E-mail: ji-pbl@mail.doshisha.ac.jp  
【ホームページ】  
PBL推進支援センター <http://ppsc.doshisha.ac.jp/>  
プロジェクト科目 <http://pbs.doshisha.ac.jp/>

### PBL教育フォーラム2014開催のご案内

PBL教育フォーラム2014「アクティブ・ラーニングにおける学習支援について考える—学習支援者としての学生の役割と、その可能性—」を開催します。学生の自主的な学びを目指すアクティブ・ラーニングにおいて、学生は学習支援者としてどのような役割を担い、さらなる可能性を秘めているのか。他大学の事例をもとに議論を深め、アクティブ・ラーニングに関わる全ての関係者の協働学習の場とします。是非ご参加ください。

日時: 2014年11月8日(土) 13:00~16:30  
会場: 同志社大学 今出川校地 良心館104番教室  
申込要(先着100名受付)

同志社大学全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」では、2014年度も社会・地域・企業と連携しながら活動しています。今回は、地域連携に取り組む2つのプロジェクトより、学生リーダーの声を紹介します。



2014年度プロジェクト科目  
「空き店舗を活用した地域活性化  
—風が起こすムーブメント—」  
【京田辺校地開講科目】

学生リーダー  
政策学部  
政策学科 2年次生  
安藤 理 さん

このプロジェクトでは、近鉄京都線新田辺駅東側にあるキララ商店街の活性化に向け、地域と連携した空き店舗活用事業の企画実践に取り組んでいる。

地域連携という学生と地域が一つになった姿を想像しがちだが、実際の商店街は「活性化」の定義すら一致しないほど多種多様な考えを持つ店主によって成り立っており、彼らとどのように関係を築いていくかは大きな課題だった。

関係づくりの第一歩として、7月に商店街主催の「キララフェスティバル」でイベントを企画・運営した。企画段階では主催者側との調整から店主への協力要請に至るまで、出来る限り店主と共に進めていくことを心掛けた。イベント自体は大盛況に終わったものの、商店街でのイベントにも関わらず店主が参加者に関わる機会が少なかったことが課題として浮かび上がった。

地域のことに地域全体で取り組むことができる仕組みの必要性と、春学期に実施したアンケートから商店街利用者のニーズとして休憩所があることなどを踏まえ、今後私たちは空き店舗をコミュニティカフェとして活用していく予定だ。

カフェという場を通じて誰もが地域と関わり合える、そうした形で連携を実現できるような励んでいきたいと思う。



「キララフェスティバル」イベントの様子



2014年度プロジェクト科目  
「かみぎゅうくんをプロデュース  
—ゆるキャラ活用で地域活性化—」  
【今出川校地開講科目】

学生リーダー  
文化情報学部  
文化情報学科 4年次生  
米田 菜穂子 さん

本プロジェクトは、かみぎゅうくんという京都市上京区のマスコットキャラクターの知名度を上げることで、地域を活性化していくことを目的としている。

上京区役所の関係者とCNS\*で情報共有しながら、5月には今宮神社御旅所でのイベントに参加し、地元の人々と触れ合うことで、かみぎゅうくんは地元でも認知度が低いという評価を肌で感じた。7月には、出町榊形商店街の七夕祭りに参加し、クイズ大会を行った。商店街の出店の運営の手伝いなど、地域の方々と交流することで結びつきを深めることができた。

秋学期には上京区に留まらず、より多くの人々にかみぎゅうくんをPRしていく方針だ。その一つの指標として、「ゆるキャラグランプリ」出場がある。沢山の方々にかみぎゅうくんを知ってもらうために観光地へ出向く予定だ。また、区外の人々も呼び込めるような、かみぎゅうくんを主体とした地元でのイベントの開催を企画している。毎年開催されるような地域に定着したイベントになることを願っている。

私達の活動が、地域の方々とかみぎゅうくんとのかかわりを深め、これからも続いていくような活動のきっかけ作りとなることを目指したいと思う。



今宮神社御旅所でのイベントの様子

\*CNS (Community Networking Service) = SNSをベースに開発された、プロジェクト科目の活動を円滑に支援するための学修支援システム。

## ◆2014年4月4日(金) 2014年度プロジェクト科目SA・TA説明会 ◆2014年7月14日(月) 2014年度プロジェクト科目春学期SA・TA協議会

全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」では、SA(スチューデント・アシスタント)もしくはTA(ティーチング・アシスタント)を各プロジェクトに設置しています。春学期の授業期間開始前に、SA・TA業務のガイドラインや、授業運営費などの諸手続き、CNSでの業務報告書のアップなど、プロジェクト科目に特化した業務の説明会を実施しました。また、授業期間末に開催されたSA・TA協議会では、活動の中で見えた課題や、SA・TAとして俯瞰的な立場での履修生との関わり方などについて活発なやりとりが行われました。



## ◆2014年5月12日(月) 2014年度学生担当者説明会

2014年度プロジェクト科目の、学生リーダー、サブリーダー、会計担当者、CNS担当者、学生成果報告書担当者を対象に、説明会を開催しました。全プロジェクト共通の年間スケジュールを確認後、情報発信を行う際の注意事項、CNSシステムの利用方法、授業運営費の出納や申請方法および会計報告、学生成果報告書の作成要領および著作権に関する諸注意などの説明が、資料に基づいて進められました。今年度より、全履修生は学生個人の学びを深め、自己評価力の向上を目的とした、本科目独自の「自己評価シート」を各学期末に作成することになり、その提出方法についても説明が行われました。



## ◆2014年6月30日(月) 2014年度春学期プロジェクト・リテラシー講習会

プロジェクト科目では、学生が主体的にプロジェクトを遂行し、その活動を通して学生が個々に身につける人間力の向上を目指して、PBL推進支援センター主催の講習会を開催しています。今年度は、昨年度に引き続きポスターセッション形式で行われるプロジェクト科目成果報告会に向けて、「伝えるちから ～ポスターセッション」と題して、パワープレイス株式会社濱村道治氏を講師に迎え、種類の異なる複数の項目(伝えたいこと)を1枚のポスターに盛り込み、多様な見方に臨機応変に対応できるよう、いかに情報共有するかをテーマに構成されました。履修生は、グループ毎に異なる商品を与えられ、利点やアピールポイントをポスターにまとめて作成します。様々な顧客を想定した複数の質疑に対してグループ内で回答を共有し、他のグループメンバーや講師を相手にセッションを行いました。また講師からは、実際に企業で行われているポスターセッションの実演や、過去の成果発表でのポスターを例に具体的にアドバイスを受けるなど、履修生にとっては、学びの多い貴重な時間となりました。



## ◆2014年7月7日(月) 2014年度プロジェクト科目春学期学生懇談会 ◆2014年8月2日(土) 2014年度プロジェクト科目春学期科目担当者・代表者懇談会

プロジェクト科目履修生代表が一同に会し、春学期の活動について情報共有を行いました。今年度は、複数のプロジェクトが共同でイベントを開催するなど、プロジェクト間の交流が早くから活発に行われており、事業を共同で行うことのメリットと情報発信の難しさを垣間見ることとなりました。春学期の授業期間終了後に開催された、担当者・代表者懇談会では、授業期間内に行った「授業アンケート」および「リテラシーアンケート」の結果や、各プロジェクトの会計担当者より提出された授業運営費の執行状況を基に進められました。プロジェクト科目の運営を統括するプロジェクト科目検討部会の部長である伊達立晶文学部教授から、各資料についてのコメントや全体の振り返りが行われた後、各担当者から春学期の授業運営について報告されました。



## ◆2014年7月27日(日) 2014年度プロジェクト科目春学期成果報告会

京田辺校地同志社ホール記念館にて、ポスターセッション形式による、春学期科目3クラスの最終報告、春学期・秋学期連結科目13科目の中間報告を行いました。プロジェクトごとのブースに分かれて、履修生全員が報告者となり、半年間の活動成果について、学内外の審査員をはじめ、他大学や教育機関関係者、オープンキャンパスに訪れた高校生や保護者、プロジェクトの履修生など約200名の参加者とともにセッションを繰り広げました。ポスターセッション終了後には、審査員から成果報告会の講評・総評がありました。その中には、履修生の努力について評価賞賛があった一方で、各プロジェクトのテーマに対する分析が甘く、まだまだ課題の掘り下げが必要なのではないかとの厳しい指摘もありました。春学期・秋学期連結科目についてはテーマについて問題を再発見し、今後の活動の見直しを行う機会となりました。最後に、最優秀賞、優秀賞および特別賞(CNS賞)の表彰が行われました。今年度は得票数が同点となった科目について、全て受賞となりました。



●最優秀賞:タイの一村一品運動商品の日本市場でのマーケティング企画 <春学期、最終報告>

●優秀賞:観光土産の創造  
京都伏見大学プロジェクト ～「学び」で観光の質向上を～  
かみぎゅうくんをプロデュース -ゆるキャラ活用で地域活性化- <春・秋連結科目、中間報告>

●特別賞:「音楽は心の薬」-高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して  
(CNS賞) かみぎゅうくんをプロデュース -ゆるキャラ活用で地域活性化- <春・秋連結科目、中間報告>

## シンポジウム2014 2014年8月9日(土)

今出川キャンパス明徳館において、PBL推進支援センター主催シンポジウム2014「社会・地域・産学連携の最前線を問う-連携教育としてのPBLの可能性と課題-」を開催しました。当日は、台風の影響もある中、全国より120人を越える参加がありました。

第1部は、同志社大学2013年度プロジェクト科目より地域活性化に取り組んだ「世界遺産をデザイン!〜花「桜」と共に生きる吉野山プロジェクト」および「京都市伏見地域活性化プロジェクト〜「学び」で観光の質向上を〜」の各履修生より、活動報告がありました。第2部は、大津晶氏(小樽医科大学商学部准教授)、森正美氏(京都文教大学地域協働研究教育センター長・総合社会学部教授)、山川尚美氏(広島修道大学ひろしま未来協創センター長・人文学部教授)、眞鍋和博氏(北九州市立大学基盤教育センター教授・地域創生学群長・地域共生教育センター長・北九州まなびとESDステーション事業責任者)より、それぞれの連携取組について紹介がありました。続くパネルディスカッションでは、第1部で登壇した学生を加えて、「大学と地域がつくる連携教育の可能性について考える」をテーマに、山田和人センター長のコーディネートのもと、教員と学生のそれぞれの視点からみた連携教育のあり方について議論を展開しました。議論は、大学の組織体制のさらなる整備により、学生や地域へのサポートを続ける必要があるということから、活動の評価指標に関するところまで及びました。大学の評価指標と現実社会での評価指標の関係性については、参加者からも興味深いテーマであるとの声があり、連携教育の新たなステージを考えるにあたって、PBL推進支援センターとしての課題が明確となったシンポジウムとなりました。

